



Title	二上山白色凝灰岩製組合式家形石棺の製作体制
Author(s)	上村, 緑
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 495-504
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

二上山白色凝灰岩製組合式家形石棺の製作体制

上 村 緑

はじめに

家形石棺は、棺蓋を屋根状に面取りし、円形あるいは方形の縄掛突起を備えた石製の棺であり、畿内では5世紀末に創出され、6世紀を通じて大型横穴式石室をもつ有力古墳に採用された。畿内における家形石棺は、石材を複数枚を組み合わせる組合式家形石棺と、棺蓋・棺身それぞれ一石を加工して製作する刳抜式家形石棺に分けられる。また、石材は熊本県宇土半島周辺で産出する阿蘇ピンク石（馬門石）、兵庫県加古川流域で産出する竜山石、大阪府・奈良県にまたがる二上山で産出する凝灰岩（以下、二上山白色凝灰岩）の3種類が利用される。これら畿内の家形石棺については、サイズ、構造（刳抜式／組合式）、突起型式、石材による明確な階層構造が指摘されている（和田 1976、石橋 2013）。

本稿では、階層的には比較的下位に位置づけられるものの、6世紀後半を中心に広範囲に採用された二上山白色凝灰岩製組合式家形石棺を対象とし、古墳時代後期の組合式家形石棺の生産・供給の一樣相について検討を行う。

1. 問題の所在と検討の視座

問題の所在 これまでの家形石棺研究における中心的な論点は石棺に表出された階層構造であり、生産・供給体制については刳抜式家形石棺と組合式家形石棺の工房・製作集団を別個のものとした佐々木好直の検討（佐々木 1994）のほか、論じられる機会は少ない。これは、一口に石棺といってもそれぞれの形態の個性が高いため、いわば「オーダーメイド」的に生産されるものというイメージがあったためではなかろうか。「棺材もあらかじめ企画された枚数を用いるというより、ありあわせですませたような状況を示すものが多い」（増田 1977b : p. 20）という指摘がなされているものの、具体的な検討が進められているとは必ずしも言えないと考える。

本稿では棺蓋と、家形石棺を特徴づける縄掛突起の形態や製作方法の分析から、組合式家形石棺の生産・供給体制の一樣相について明らかにしたい。

対象資料・地域 本稿で対象とする資料は、二上山周辺で産出する凝灰岩製の組合式家形石棺

とする。また、対象とする地域は、二上山白色凝灰岩製家形石棺が特に集中して分布する、後の律令制下の大和・河内地域とする。

資料の分類 従前の研究において、家形石棺は刳拔式・組合式ともに棺蓋に付加された縄掛突起の数により分類が行われており、本稿でもこれを踏襲する。棺蓋に付加された縄掛突起の数により、それぞれ1・2型式（短辺に1つ、長辺に2つ縄掛突起をもつ）、1・3型式（短辺に1つ、長辺に3つ）、0・2型式（長辺のみ2つ）、0・3型式（長辺のみ3つ）、0・4型式（長辺のみ4つ）、0・0型式（縄掛突起をもたない）と呼称する（図1）。なお、1・3型式は畿内においては御所市條ウル神古墳（金澤 2019）の刳拔式家形石棺にのみ採用される形式であり、組合式家形石棺にはみられない。

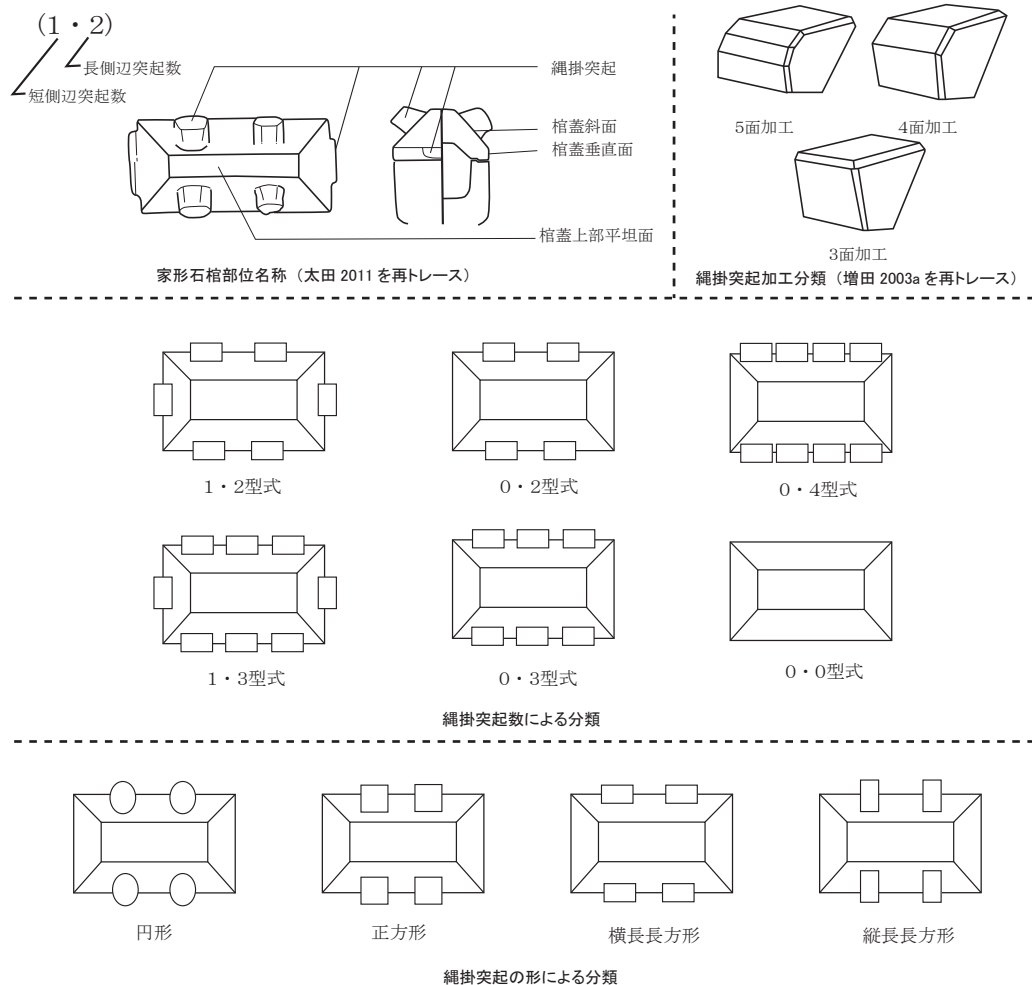


図1 部位名称と分類

2. 諸型式の特徴

1・2型式 / 0・2型式（図3） 和田晴吾の「石川右岸石棺群」に該当する（和田 1976）。事例数が少ないが、縄掛突起の面取り方法は2面、3面、4面と様々である。棺蓋枚数は1枚または2枚であり、後述する0・3型式、0・4型式より少なく、また棺蓋の厚さも比較的厚いものが多い。1・2型式及び0・2型式は刳拔式家形石棺に通有の型式であり、組合式家形石棺では使用が制限されていた可能性が指摘されている（石橋 2013 : p. 197）。部材枚数が少ないことや棺蓋が厚いことも組合式家形石棺における階層性の高さを示しており、1・2型式、0・2型式の組合式家形石棺は刳拔式家形石棺の影響のもとで製作された可能性がある。

0・3型式（図4） 0・3型式及び後述する0・4型式は、和田晴吾が「葛城型」としており、組合式家形石棺独自の形態とされる（和田 1976）。0・3型式は特に大和の葛城地域に分布の中心が認められるが、摂津地域や河内地域などにも広く分布している。縄掛突起の形状は方形を基調とするが、正方形・縦長長方形・横長長方形など様々であり、また面取り方法は3面及

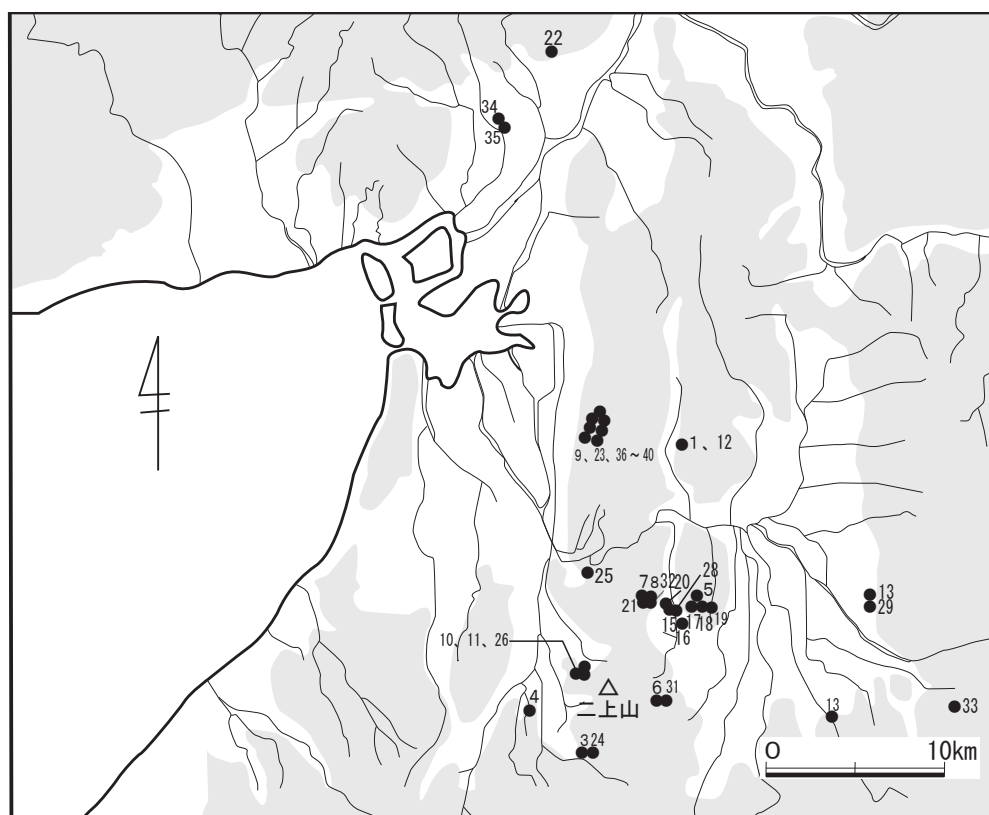


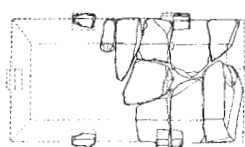
図2 対象資料分布図

表 1 対象資料一覧

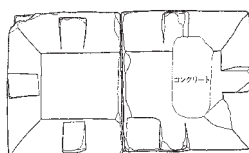
	古墳名	地域	時期	突起型式	縄掛突起形	棺蓋部材 枚数	面取り	上部平坦面か らの作り出し*	異形態の組 み合わせ**	備考
1	梨本東 2 号墳	大和	TK209	1・2	横長長方形	1 または 2	4			一部復元
2	北嵯峨植木屋	大和	不明	1・2	横長長方形	1	2			詳細不明
3	御旅所北古墳玄室棺	河内	TK209	1・2	縦長長方形	2	2			
4	田中 2 号墳	河内	不明	1・2	横長長方形	2 か	3			詳細不明
5	御坊山 1 号墳	大和	不明	0・2 か	縦長長方形	2 か	3			直葬、詳細不明
6	小山 2 号墳奥棺	大和	TK43	0・2	円形	2	—			復元多い
7	鳥谷口古墳石柳天井石	大和	飛鳥	0・2	正方形	1	3	●		転用
8	鳥谷口古墳石柳北側石東	大和	飛鳥	0・2 か	正方形	1 または 2	3 か	●		転用
9	服部川 62 号墳	河内	TK209	0・2	正方形	不明	3	●		復元
10	一須賀 O 6 号墳底石	河内	TK209~ 飛鳥	0・2	縦長長方形	1	2	●		
11	一須賀 WA 1 号墳	河内	TK43	0・2	横長長方形	2	3			
12	三里古墳	大和	TK43	0・3	横長長方形	不明	3			復元
13	ホケノ山古墳	大和	TK43	0・3	縦長長方形	3	3	●		
14	馬見浄土寺棺	大和	不明	0・3	正方形	3	2			詳細不明
15	松里園 1 号墳	大和	TK43	0・3 か	横長長方形	3 か	3	● (1 つのみ)		縄掛突起のつくり異なる
16	藤山 1 号墳	大和	不明	0・3	横長長方形	3	3		●	旧二上小学校保管
17	北今市 1 号墳北棺	大和	TK43	0・3	縦長長方形か	不明	3 か			詳細不明
18	北今市 1 号墳南棺	大和	TK43	0・3 か	縦長長方形	3 か	3			推測
19	北今市 2 号墳南棺	大和	TK43	0・3	縦長 / 横長長方形	3	3	●	●	1 枚のみ 1・2 型式
20	櫛山古墳第 1 主体	大和	TK43	0・3	縦長長方形	3	2	●		
21	鳥谷口古墳石柳北側石西	大和	飛鳥	0・3 か	正方形	1 または 2	2 か	●		転用
22	梶原 D 1 号墳	摂津	TK43	0・3 か	縦長長方形	3 か	3	●		推測
23	五条山 2 号墳	河内	TK43	0・3	縦長長方形	3 か	3	●		復元
24	湯山古墳	河内	TK43~209	0・3	正方形	3 か	3	●		
25	東原ワカ山古墳	河内	不明	0・3	縦長長方形	3	2			詳細不明
26	一須賀 O4 号墳	河内	TK43	0・3	縦長長方形	2	不明			0・2 型式の可能性あり
27	御旅所北古墳羨道棺	河内	TK209	0・3	縦長長方形	2	3	●		
28	茶山古墳	大和	TK43	0・4	縦長長方形	2	不明	●		
29	茅原狐塚古墳	大和	TK209	0・4	縦長長方形	2 か	3			復元
30	西ノ山	大和	不明	0・4	縦長長方形	2	3 か	●	●	
31	小山 2 号墳前棺	大和	TK43	0・0	—	4	—	—		
32	鳥谷口古墳石柳底石	大和	飛鳥	0・0	—	1	—	—		転用
33	カタソバ 11 号墳	大和	TK43	0・0	—	2	—	—		復元
34	南塚古墳奥棺	摂津	TK10	0・0	—	2	—	—		
35	南塚古墳前棺	摂津	TK10	0・0	—	2	—	—		
36	山畑 8 号墳	河内	TK43	0・0	—	4	—	—		
37	桜井 1 号墳	河内	飛鳥	0・0	—	4	—	—		2 種類の石材
38	大窪・山畑 40 号墳 (すえの森古墳)	河内	TK209	0・0	—	4	—	—		
39	神立 7 号墳 2	河内	飛鳥	0・0	—	5	—	—	●	特殊
40	神立 7 号墳 3	河内	飛鳥	0・0	—	4	—	—	●	

*縄掛突起を上部平坦面から作りだす **異なる形態の棺蓋を組み合わせる

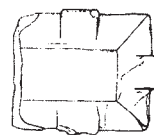
1・2型式



梨本東2号墳*



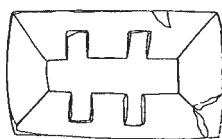
御旅所北古墳玄室棺



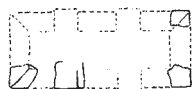
田中2号墳

0・2型式

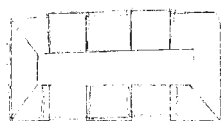
縄掛突起を上部平坦面から作り出す



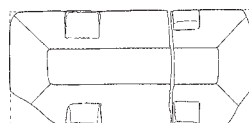
一須賀06号墳底石転用棺



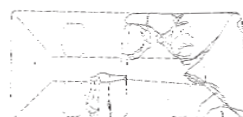
服部川62号墳*



鳥谷口古墳横口式石槨天井石転用棺



一須賀WA1号墳



小山2号墳奥棺

*一部復元

0 (S=1/80) 2m

図3 1・2型式及び0・2型式の組合式家形石棺

び2面である。棺蓋枚数は3枚の事例が多く、1・2型式及び0・2型式より多くの石材が使用される。

0・3型式の縄掛突起の特徴として、棺蓋上部平坦面から直接作り出すものが多いことが挙げられる。この製作方法は、1・2型式及び0・2型式ではほとんどみられず、組合式家形石棺でのみ使用される独自の製作技術と考えられる。また、櫛山古墳第1主体例（泉森 1976）や、北今市2号墳南棺（入倉・十文字 2006）は、サイズや縄掛突起の形状・型式の異なる棺蓋を組み合わせ、まさに「ありあわせ」といえる例もあり、こうした特徴も0・3型式及び0・4型式で多く確認される特徴である⁽¹⁾。

0・4型式（図5） 0・3型式と同様、和田晴吾の「葛城型」に分類される（和田 1976）。二上山白色凝灰岩製は事例数が乏しく、また復元例が含まれており注意が必要であるが、茶山古墳例（島田 1956）は、縄掛突起を上部平坦部から作り出す特徴がみられる。また西ノ山所在例（泉森・菅谷 1971）は異なる規格の棺蓋を組み合わせしており、0・4型式のなかにも、0・3型式の製作上の特徴を備えている点は注目される。

0・0型式（図6） 和田晴吾の「山畑型」に分類され（和田 1976）、棺蓋の厚さが薄いことが特徴である。また、棺蓋枚数は4枚または5枚が多く、薄い石材を多数使用することが特徴

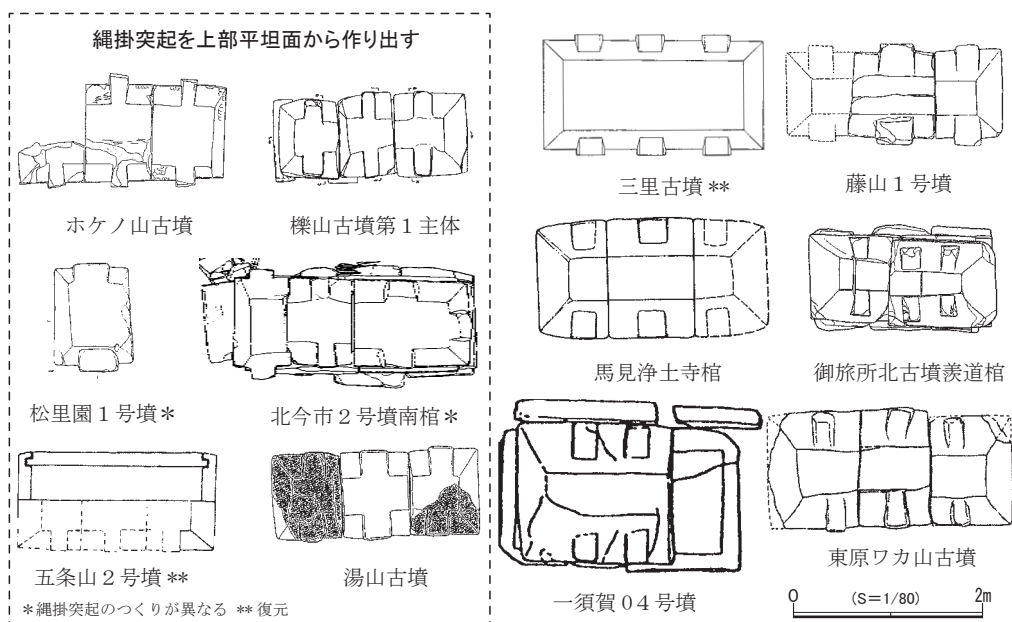


図4 0・3型式の組合式家形石棺

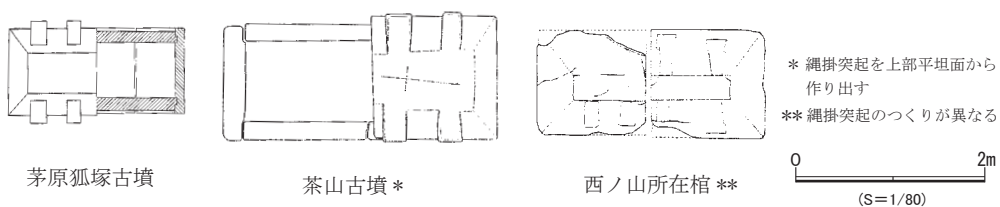


図5 0・4型式の組合式家形石棺

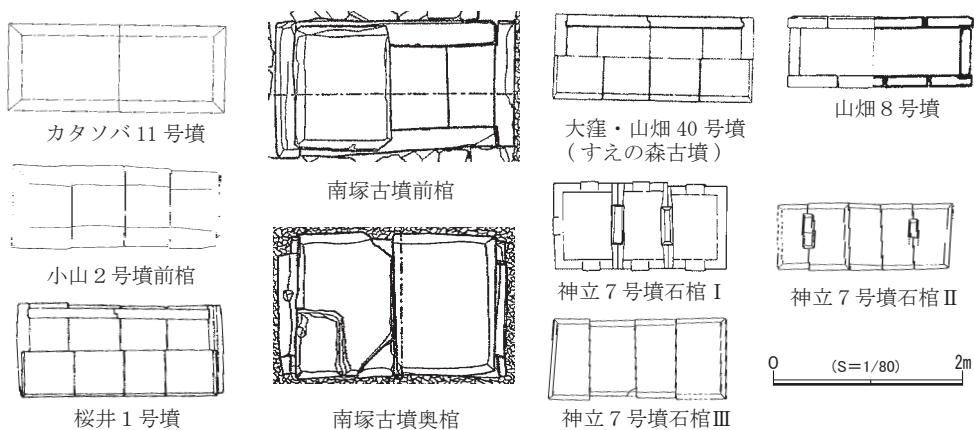


図6 0・0型式の組合式家形石棺

である。神立7号墳（芝塚古墳）石棺Ⅰ・石棺Ⅱ（高萩編1994）のように、棺蓋上部に特異な縄掛突起を有する事例がある。

3. 棺蓋の特徴からみた二上山白色凝灰岩製 組合式家形石棺の生産・供給

型式間の関連性 ここまで二上山白色凝灰岩製家形石棺の棺蓋に着目して、それぞれの型式の特徴を抽出した。このうち、0・3型式と0・4型式の組合式家形石棺は、縄掛突起の製作方法や異なる規格の棺蓋を組み合わせるなどの特徴を共有することから、型式間の関連性が強うかがえる。

1・2型式と0・2型式の組合式家形石棺は、いずれも刳拔式家形石棺の影響の下で限定的に制作された可能性が指摘されているが、0・2型式の組合式家形石棺は、一須賀O6号墳底石転用例（大阪府教育委員会1984）の縄掛突起のように0・3型式ないしは0・4型式との製作上の共通性がうかがえる事例もあり、組合式家形石棺の他型式の影響を全く受けずに製作されたとは想定しにくい。一方で、1・2型式の組合式家形石棺は、他型式と特徴を共有する事例はない。さらに石材を寄せ集めて製作する事例もなく、1・2型式は他型式の影響を受けることなく製作されたと考えられる。

0・0型式の組合式家形石棺は、縄掛突起を作らないため棺蓋が他型式に比べて薄いことが特徴である。したがって、他型式の家形石棺を製作した後の余った石材や少量の石材で製作することが可能であり、棺蓋枚数の多さもこのような状況を反映しているものと考えられる。このような特徴から0・0型式についても、他型式の影響を受けずに製作されたと考えられる。

0・3型式と0・4型式は縄掛突起や棺蓋の製作方法に共通性があり、共通の製作体制が想定される。0・4型式は総じて製作数が少ないことから、0・3型式の影響のもとに製作されたと考えられる。

組合式家形石棺の製作体制 ここまでの検討をまとめ、二上山白色凝灰岩製家形石棺の製作体制について次のように整理したい。

- ① 1・2型式の組合式家形石棺は、他型式と共通する特徴をもつ事例がなく、他型式の影響を受けずに独自に製作される。
- ② 0・0型式の組合式家形石棺は、縄掛突起を製作する必要がなく少量の石材で製作可能であることから、1・2型式と同様に他型式の影響を受けずに制作される。
- ③ 0・3型式及び0・4型式の組合式家形石棺は、異なる型式ながら縄掛突起や棺蓋の製作方法に共通性があり、同一の製作体制と考えられる。
- ④ 0・2型式は1・2型式と同一の製作体制が想定されるが、一部に0・3型式ないしは0・

4 型式の製作体制の影響を受ける。

このようにみると、組合式家形石棺の製作体制は、1・2 型式の製作体制 / 0・0 型式の製作体制 / 0・3 型式と 0・4 型式の製作体制の 4 つに分けることが可能である。0・2 型式の製作体制は、1・2 型式の製作体制に組み込まれながら、0・3 型式と 0・4 型式の製作体制とも近い関係にあったと考えたい。

佐々木は工人が刳拔式家形石棺と組合式家形石棺を同一作業場で製作して石棺発注者に納品するパターンと、それぞれ別個の作業場で製作して納品するパターンの 2 つを想定しているが、刳拔式家形石棺と組合式家形石棺に形態上の互換性がほとんどみられないことから、後者のパターンが採られたであろう。また、組合式家形石棺も、1・2 型式と 0・2 型式、0・3 型式と 0・4 型式、0・0 型式とそれぞれの型式ごとに製作体制が異なっていたと考えられる。さらに、少なくとも 1・2 型式、0・3 型式と 0・4 型式、0・0 型式の 3 つの体制においては、ほとんど相互に影響を与えることはなかったと想定される。

おわりに

本稿では、二上山白色凝灰岩製家形石棺の製作体制について、予察的ではあるが検討を行った。今回検討した製作体制がそのまま製作集団と捉えられるかはさらなる検討が必要であるが、古墳時代後期の家形石棺の製作を理解するための一助になるものとする。今回は棺蓋のみの検討に留まったが、今後は棺身の様相を踏まえたうえで総合的に検討する必要がある。また、組合式家形石棺は竜山石製も多数製作されており、竜山石製組合式家形石棺についての検討も、二上山白色凝灰岩製と比較するうえで重要な視点であると考えられる。

註

- (1) 縄掛突起をもつ型式については、異なるサイズの棺蓋を組み合わせる場合も、縄掛突起の形状がある程度揃えられているため、石材を組み合わせたのちに縄掛突起を作り出したと考えられる。北今市 2 号墳南棺例など、縄掛突起の形が異なる棺蓋を組み合わせたものは縄掛突起を作り出した後の棺蓋を使用したと想定されるが、こうした使用法は例外的であり、基本的には型式ごとに石材のサイズや縄掛突起の形状が揃えられたと考えられる。

引用・参考文献

- 石橋 宏 2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房、東京
- 太田宏明 2011「家形石棺」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学 3 同成社、東京：pp. 128-

- 佐々木好直 1994「石槨使用石材と石棺蓋」『鳥谷口古墳』奈良県文化財調査報告書第67集 奈良県立橿原考古学研究所、奈良：pp. 43-48
- 日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会編 2010『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』、兵庫
- 増田一裕 2003a・b・c「家形石棺の基礎的分析」（上）・（中）・（下）『古代学研究』第162号・第163号・第164号 古代学研究会、大阪：pp. 1-11、pp. 1-20、pp. 1-20
- 和田晴吾 1976「畿内の家形石棺」『史林』第59巻第3号 史学研究会、京都：pp. 1-59

遺跡文献

- 一須賀O4号墳・一須賀O6号墳：大阪府教育委員会 1984『一須賀・葉室古墳群—葉室地区の調査—』一須賀WA1号墳：宮崎泰史 2006「一須賀古墳群の調査VI」『館報』10 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 馬見浄土寺棺：増田一裕 1977「畿内系家形石棺に関する一試考」『古代学研究』第83号 古代学研究会：pp. 23-37
- 大窪・山畑40号墳（すえの森古墳）：花田勝広 2008「高安千塚の基礎的研究」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要13 八尾市教育委員会
- 御旅所北古墳：尾谷雅彦 1983『御旅所・御旅所北古墳調査報告書』千早赤阪村文化財調査報告書第1冊 千早赤阪村教育委員会
- 梶原D1号墳：川端博明 1998『梶原古墳群発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第4輯 名神高速道路内遺跡調査会
- カタソバ11号墳：関川尚功・近江俊秀（編） 2003『栗原カタソバ遺跡群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第65冊 奈良県教育委員会
- 北今市2号墳：入倉徳裕・十文字健 2006「北今市古墳群」『奈良県遺跡調査概報』2005年 奈良県立橿原考古学研究所
- 北嵯峨植木屋所在棺：安藤信策 1975「山城の石棺」『京都考古』第15号 京都考古刊行会
- 櫛山古墳：島田暁 1956「北葛城郡当麻村大字当麻 茶山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第8輯 奈良県教育委員会
- 神立7号墳：高萩千秋（編） 1994『芝塚古墳』財団法人八尾市文化財調査研究会報告38 財団法人八尾市文化財調査研究会
- 五条山2号墳：東大阪市教育委員会 1996『東大阪市の古墳』
- 御坊山1号墳：白石太一郎・前園実知雄 1974『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会
- 小山2号墳：今尾文昭・西村匡広 1998「太田遺跡第5次」『奈良県遺跡調査概報』1997年度第3分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 桜井1号墳：原田修 1986「桜井1号墳発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要』1985年度東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要27 東大阪市教育委員会
- 條ウル神古墳：金澤雄太 2019『奈良県御所市條ウル神古墳—範囲確認発掘調査報告—』御所市文化

財調査報告書第 56 集 御所市教育委員会

松里園 1 号墳：泉森皎 1977「古墳時代」『上牧町史』上牧町役場

田中 2 号墳：松井忠春 1985「田中古墳群」『富田林市史』第 1 巻 富田林市史編集委員会

茅原狐塚古墳：網干善教 1959「大和三輪狐塚古墳について」『古代学』第 8 棺第 3 号 古代学協会

茶山古墳：島田暁 1956「北葛城郡当麻村大字当麻 茶山古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』
第 8 輯 奈良県教育委員会

鳥谷口古墳：佐々木好直編 1994『鳥谷口古墳』奈良県文化財調査報告書第 67 集 奈良県立橿原考古学研究所

梨本東 2 号墳：寺沢薫 1985「梨本東遺跡発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報』1984 年度第 1 分冊 奈良県立橿原考古学研究所

西ノ山所在棺：泉森皎・菅谷文則 1971「大和葛城の笛吹・山口古墳群の分布」『古代学研究』第 60 号 古代学研究会

東原ワカ山古墳：梅原末治 1934『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第 5 輯 大阪府

服部川 62 号墳：花田勝広 2008「高安千塚の基礎的研究」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要 13 八尾市教育委員会

藤山 1 号墳：泉森皎 1976「古墳時代」『香芝町史』香芝町役場、奈良

ホケノ山古墳：岡林孝作・水野敏典編 2008『ホケノ山古墳の研究』橿原考古学研究所研究報告第 10 冊 奈良県立橿原考古学研究所

三里古墳：河上邦彦編 1977『平群・三里古墳』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告 33 冊 奈良県教育委員会

南塚古墳：廣瀬覚 2014「南塚古墳」『新修茨木市史』茨木市

山畑 8 号墳：東大阪市教育局委員会 1996『東大阪市の古墳』

湯山古墳：鹿野義則 2000「湯山古墳の石棺」『古代学研究』第 150 号 古代学研究会：pp. 4-5